

令和5年度「校内サポートルーム(KSR)研究指定校事業」成果報告書

1 指定校・指定校群 (観音寺市立豊浜中学校)

2 実施の内容

(1) KSR運営体制

本校では、KSR担任は朝の会や給食、帰りの会以外にも多くの時間KSRの教室で指導にあたっている。しかし、教えることができる教科に限られることもあり、生徒との関わりのある教職員や教科に配慮して生徒への支援・指導を行った。教職員間の情報の引継ぎは、「KSR学級日誌」を用いて行い、生徒の登下校時刻やKSRでの活動、次時の教職員への連絡事項を確認できるようにした。

(2) 個別の支援計画の作成

県教育委員会特別支援教育課が作成している「個別の指導計画」の様式を参考に、「個別の支援計画」の様式を作成した。特別支援教育課の「個別の指導計画」の項目に加えて、生徒の家庭環境について整理することや、出席状況を記録してより客観的に見取りや評価、計画の練り直しを行うことができるよう工夫した。また、作成にあたって、生徒やその保護者と最も関わりのある学級担任に協力してもらい、できるだけ多くの情報を整理するよう努めた。

3 成果

(1) 校内サポートルームにおける生徒の様子

現在、4名の生徒が日常的にKSRを利用しており、個別の支援計画を作成している。

生徒	学習体制	教師のかかわり	環境
A	自習に限らず、教職員の学習指導を受けることができる。また、所属学級と同じ学習活動をほぼ同じタイミングで行うこともある。	学校行事や進路に関わる連絡や提案を、教職員から随時聞くことができる。また、多くの教職員と、日常的な会話を楽しんでいる。教職員の提案を受けて、オンラインで集会に参加したこともある。	他の生徒と同じ通用門から入り、同じ自転車置き場を利用している。KSR内では、開放的な空間で活動している。給食の返却などで、KSRの外へ出ることもある。
B	自習に限らず、教職員の学習指導を受けることができる。特に、得意な教科では教職員と一緒に時間いっぱい集中して学習に取り組んでいる。	進路に関わる連絡を、教職員から随時伝えることができる。また、多くの教職員と、日常的な会話を楽しんでいる。興味のある話題では、進んで話すことがある。	KSR近くの通用門から登校し、KSR近くの指定された場所に自転車を停めている。KSR内では、開放的な空間で活動している。給食の返却などで、KSRの外へ出ることもある。
C	自習を中心に学習し、教職員からの提案に応じて、所属学級と同じ活動をKSRで行うことができる。自習で進めたワーク類の提出も行っている。	学習の進め方について、関わりのある教職員が適宜助言しており、素直に受け止めている。	保護者の送迎により、登校している。KSRでは、パーテーションで区切った空間を中心に活動するが、試験の時には開放的な空間に移動して受験している。
D	自習を中心に学習し、教職員からの提案に応じて、所属学級と同じ活動をKSRで行っている。	関わりのある教職員と談笑を楽しんでいる。	他の生徒と同じ通用門から入り、KSR近くの指定された場所に自転車を停めている。KSR内では、開放的な空間で活動している。

(2) KSRにおける活動及び支援の工夫

a. 環境整備

KSRを、裏門の近くに位置し、他の生徒と異なる動線を確保できる教室に設置した(図1)。室内では、開放的な空間(図2)と、パーテーションで区切った個の空間(図3)を確保できるように工夫した。また、3年生が多いことから図4のような進路コーナーを設置した。県立高校・私立高校・通信制などのサポート校のパンフレットを机の上に広げて置くことで、生徒は一目見てどのような学校があるのか知ることができ、パンフレットへ手を伸ばしやすくなるよう工夫した。KSRを利用するまでに至っていない不登校生徒の進路懇談の場として利用することもあり、その際もこの進路コーナーを活用して、生徒が興味をもって、気軽に進路実現のための必要な情報を得ることができた。



図1



図2

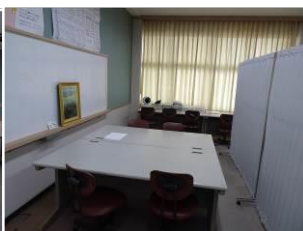


図3



図4

b. 教職員による学習指導・生活指導

教職員がKSRへ赴き、自身の専門教科の指導を行うことで、生徒は自習に限定されない学びを行うことができた。教職員は、生徒の学習の進捗や理解度を確認することができ、個に応じた指導を行うことができた。生徒は、自習で進めたワーク類を提出するだけでなく、自習では理解できなかった部分について説明を聞いたり、疑問に思ったことを質問したりしながら学習を進めた。KSRで定期試験や学習の診断を受験することもでき、自信や学習意欲の向上につながることができた。



図5

また、学習以外でも、教職員が適宜、生活習慣改善のための助言や、活動の提案などを行った。これらの支援により、行事のある日には早めに登校できたり、オンラインで集会に参加できたりするなど、日々の活動を充実させることができた(図5)。

(3) 総括

KSRを開設することにより、長期欠席生徒の再登校や、長期欠席の未然防止を実現することができた。日常的に生徒が登校しているため、適宜、生徒の学習の進捗を把握しての指導ができたり、学校行事への参加や進路希望等の意思確認を行ったりすることができ、個に応じた指導を行うための基礎を築くことができた。また、生徒に活動の選択肢を提示し、生徒がしたい学習を行えるようにすることで、生徒が自分のペースで活動できるようになり、継続的なKSR利用につながったと考える。一方で、個別の支援計画が作成の段階で留まり、広く教職員へ共有することができなかったことや、生徒への支援・指導の在り方について共通認識をもてなかったことが課題としてあげられる。KSR担任に限らず、学校全体として生徒を支援していくために、KSRに通っている生徒の学年団の先生方や校内支援委員会を中心に生徒の支援・指導の在り方を検討し、今後はICT機器の利用を工夫して、確実に共有を図れるようにしたい。また、不登校傾向にある生徒のうち、過半数の生徒がKSRの利用に至らなかった。このことを踏まえ、必要に応じてKSRの利用を提案するとともに、不登校の要因に家庭環境や発達障害等が含まれるケースにおいてもKSRの利用ができるように工夫することで教育の機会を確保していきたい。